

# みっつの“わ”

R.4. 9月号

No.6

河内長野市立長野小学校  
支援人権部発行

休み時間にも子どもたちが演技の練習をしたり、教室では映像を見ながらダンスをする子どもたちがいたり、運動会に向けて頑張っている姿をあちらこちらで見られるようになりました。運動会は、一つのことをみんなで作り上げることの難しさや大変さ、それをやり遂げたときの喜びや達成感を味わうことができ、子どもたちにとって大きな学びを与えてくれる機会だと思います。毎日の練習で疲れて帰ってくることもあると思いますが、ぜひとも労いや応援の言葉をかけてあげてください。



## 子どもが伸びる、魔法の口ぐせ

「この子は、人見知りなんです。」「うちの子は、本当に落ち着かない子だ。」などと、子どもの性格を分析したり、決めつけたりした言葉を耳にすることがあります。これが、否定的な言葉だとすると、子どもは、その言葉を聞いているうちに「自分は落ち着かない子なんだ。」と、自分のことを悪く捉えてしまうようになります。人間というものは、常にいろいろなことを吸収し、学び成長していく存在です。子どもの時期だけでなく、大人になっても絶えず変化し、進化していくものです。つまり今、表に出ている面が、そのまま固定化してしまうわけではありません。「この子はこういう子」と子どもの性格を決めつけずに、子どもの成長を広い心で見守っていききたいものです。

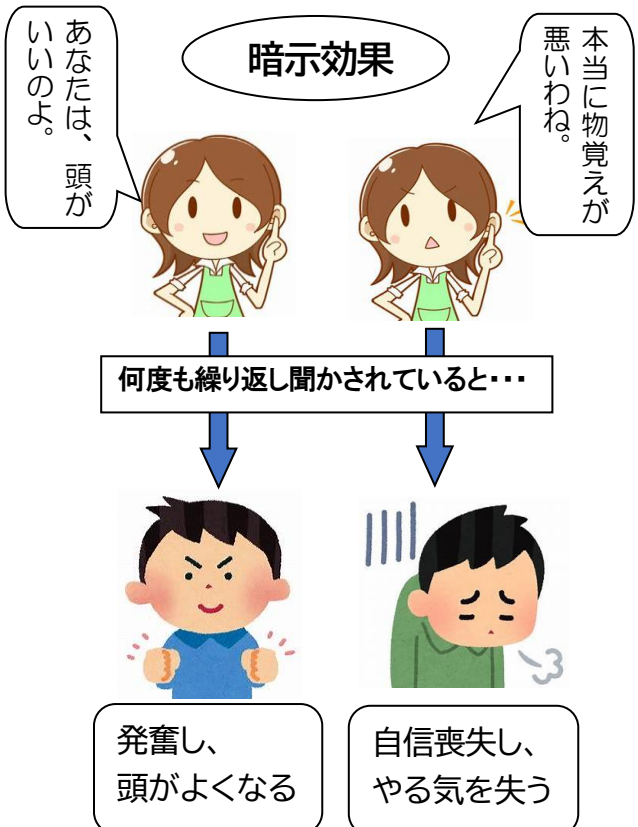
性格だけでなく、大人がいつも口ぐせのように言っている言葉は、良くも悪くも子どもたちに大きな影響を与えます。そこで、子どもが伸びる魔法の口ぐせを紹介します。

## 「あなたは頭がいい」

子どもに対して、「どうして、こんなこともわからないの?」「本当に物覚えが悪いわね。」という言葉を使い続けていると、心理学でいう「暗示効果」が強くなり、子どもは自分自身のことを「頭が悪いのだ」と意識するようになり、やがて、やる気を失ってしまうこととなります。

子どものやる気を引き出すには、否定するよりも、たえず子どもの可能性を示唆してあげることが大事です。暗示効果を利用して、「あなたは、本当は頭がいいのよ。努力さえすれば」と、何回も繰り返し子どもを励ましていると、子どもは発奮するものです。

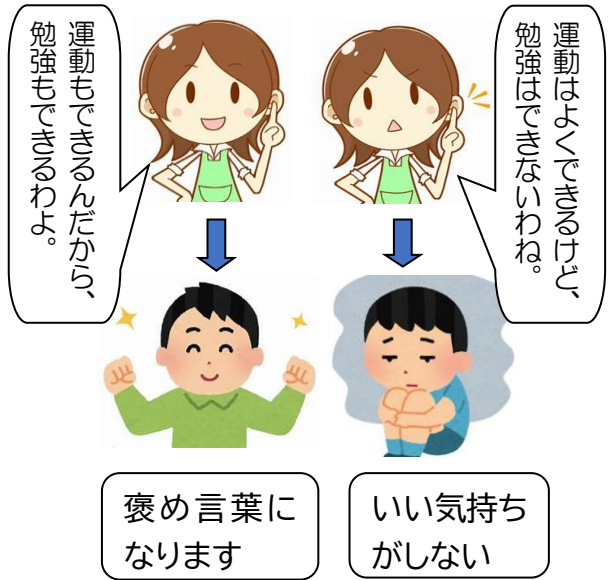
そのときに、「ここは、こういうふうにしてみれば」と、具体的な方向性を示したり、指摘したりしてあげれば、子どもは何が問題で、それをどう克服していくか自分なりに考えるようになります。



# 「〇〇だけど△△は」ではなく「〇〇だから△△も」

「ものは言いよう」という言葉がありますが、同じ内容でも言い方次第で相手に与えるイメージはがらりと変わってくるものです。例えば、鼻が低く、色白できれいな人がいたとします。「色白できれいだけど、鼻が低いね。」と「鼻は低いけれど、色白できれいだね。」では、前者は、いい気がしないけれど、後者は褒められた気持ちになります。

子どもに対しても同じで、「運動は得意なのに勉強はだめ」と考えるか、「運動が得意だから、勉強もできるはず」と考えるかは、子どものやる気は月とすっぽんほども違ってきます。子どもは、親に期待されていることがわかると、やりたくないことでも「できるよ」と返事してしまうものです。



# 「何をせよ」ではなく「何からするか」を問う

「指示待ち人間」という言葉が言われるようになって久しいですが、指示されたことはその通りにするが、指示がないと何もできない子どもが増えています。

日頃、細かいことまで、子どもの行動に注意や指示を与えすぎていませんか？「言わないと何もしないんです。」という声を聞くことがあります。もしかしたら、言い過ぎてしまっているのかもしれませんが、子どもは、何か問題にぶつかったとき、自分なりに考えて行動するという体験を重ねるうちに、自主性や判断力を身につけるものです。

しかし、自分で考えるより先に、他の人から判断や結論を与えられると、子どもはそれ以上考えようとしなくなります。こうして、大人の指示に従う習慣がついてしまうと、いざ自分で判断して行動しなければならないとき、子どもが途方にふてしまうのも無理はありません。

では、どうすればいいかというと、子ども自身に考えさせる機会をできるだけ与えてあげることです。宿題や遊びなど、「今日は何から先にする？」と優先順位を子どもに決めさせることが格好の自主性を育む訓練になります。子どもに計画を立てさせることをおすすめします。

毎日何気なく発している言葉、されど子どもの成長に大きく関わる言葉です。ちょっとした言葉かけでより良い方向に変わっていくと信じて、言葉かけを意識してみてください。

